

| 生 | を | 見 | つ | め | て |

サバイバーからのメッセージ



障害を負って初めて気付くことがあります。小さな段差や、ぶつかりそうになっても平気で横切っていく人。それでも「障害がある人こそ、表に出てないといけない。人の輪に入り、明るい光を浴びないといけない」。そう語るのは3年前に重い脳出血を患ったSさん(49歳)です。

Sさんは家族で経営する飲食店の元板前さん。30代前半

です。直前まで全く症状がなく、「運転中であつて本当によかった」とSさんは振り返ります。

すぐに救急車を呼び病院へ。手術後、半年間入院してリハビリを受けました。Sさんは退院後、自宅に戻るともりでしたが、これまでと同様の生活は難しく、かがわ総合リハビリテーションセンター(高松市)の成人支援施

すが、退所の日が近づくにつれて不安が募りました。

実はSさんには高次脳機能障害があり、家族にかかる負担を考えたのです。高次脳機能障害とは、事故や脳卒中などで脳に重い障害を受けた後、「覚えられない」「感情を抑えられない」「その場に応じた言葉が出ない」などの症状が現れることを言います。

施設で生活をしている間にSさんは、接し方に悩む他の家族から相談されることがありました。「自分たちにそのつもりはないけれど、迷惑をかけているかもしれない。目に見えて分かる障害ではないから難しいと思うけれど、家族も障害を理解する努力が必要だと話しました」。そしてSさんも悩んだ末に一人で暮らすことを選びました。

腕を生かして自立生活

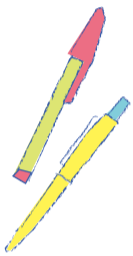
アパート暮らしを始めてちょうど1年。現在は就労継続支援B型事業所でお弁当の販売をしているSさん。メンバーは5人。職員のフォローもあり、仕事

上の不便さは全く感じないそう。お弁当は店頭販売のほかにも市役所に配達したり、産直店に手作りのスイーツを卸したりしています。Sさんはもちろん調理担当。「金銭面ではまだまだ不安があるので、売り上げを伸ばして、収入を増やしたいですね」と目標を語ってくれます。

平日は慌ただしく過ぎますが、一人で過ごす週末は気持ちが落ち込むことも。「友達がいつも気にかけてくれて、総業を届けたり外に連れ出したりしてくれます。本当にありがたい」。

病気をしてから強く感じるのは、つながりの大切さ。同じ障害を持つ人が孤独を感じないよう、OB会をつくりたいとSさん。「気兼ねなく集まり情報交換したい。楽しい時間になりたいですね」。これには成人支援施設のスタッフも賛同し、「協力を惜しまない」とうれしい返事。Sさんの仕事が増え、増えました。

次の目標はOB会 孤独を感じる 障害者のために



Sさん(高松市)

で大動脈解離を経験し、生活には気を付けていましたが、仕事柄、食事の時間がまちまちで、お酒こそ飲まなかったものの血圧が高く、上が140台、高いときで200を超えていたそうです。

発症は、お客さんを車で送り、お店に戻ってひと息ついたとき。椅子に座ろうと何度も腰を下ろしますが、うまく座ることができなかったそう

設に入所し、生活能力の向上を主眼とした自立訓練を受けることになりました。

理解されにくい 高次脳機能障害

施設で過ごした1年半の間に、装具を付け、ついで歩けるまでに回復。トイレに行く、お風呂に入る、掃除をする、料理を作るといった基本動作をマスターしたSさんで

「いずれは車も持たたい」とSさん。「友達の支援はうれしい反面、申し訳ないという気持ちもあります」。ドライブはいい気分転換になるそうです



「いずれは車も持たたい」とSさん。「友達の支援はうれしい反面、申し訳ないという気持ちもあります」。ドライブはいい気分転換になるそうです